

2020. 11. 1. 聖徒の日主日礼拝式説教

聖書：ペトロの手紙―1章 3-9節

『生き生きとした希望』

今朝と一緒に聞きます聖書の言葉は、ペトロの手紙と呼ばれる書簡で、この手紙の著者が広い地域に散在しているキリストを信じる者たちに送った手紙です。1節に「各地に離散して仮住まいしている選ばれた人たちへ」とあるのは、別に借家暮らしをしている人、ということではなくて、今それぞれの場所で暮らしているけれど、最終的には、天の住まいに帰る人々、という意味で書かれた言葉です。

この人たちは6節にあるような、試練にさらされるような状態にありました。それがどのようなものであったのかはよくはわからないのですが、ローマ帝国のキリスト教徒への迫害が始まっており、洗礼を受け、キリスト教信仰に生きることでそれ自身が、大きな困難や、場合によっては殺されるというような事態も迫っていました。そのような中にある人たちに向けてこの手紙は書かれています。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」神がほめたたえられますように。神様が讃美され、その栄光がほめたたえられますように、というのがペトロの手紙がまず言おうとしていることです。厳しい状況、困難な状態にある中で、この手紙がまず伝えたかったこと、それが神をほめたたえよう、というのは不思議なことです。普通に考えれば、このような困難の中にあるのだから、神さま助けてください、という祈りや願いが最初に記されていて不思議ではありません。しかし、ペトロの手紙はそうではなかった。

「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって生き生きとした希望を与え、またあなた方のために、天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐものとしてくださいました」。なぜ神をほめたたえるのか。どうして神を讃美しようと呼びかけるのか。それが3節後半から9節までに記されていることです。この3節後半の部分、協会共同訳はこう訳しています。「神は、豊かな憐

れみにより、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して、わたしたちを新たに生まれさせ、生ける希望を与えてくださいました」今度の訳では、死者の中からイエス・キリストを神が復活させた、それによって、わたしたちも新しく生まれさせてくださる、というつながりが分かる翻訳になっています。神がイエス・キリストを復活させられた。その神がわたしたちに復活によって生きるいのちを与え、さらに生ける希望を与えたのだ、というのです。そしてそれは全部神の恵みの働きだ、と言っているのです。だから神をほめたたえようと語るのです。

ローマ帝国の迫害にさらされていた人々にとって、「死」は自分の身に迫るものでした。家族を失う者もいたでしょう。愛するものを殺された者もいたでしょう。しかしそうした迫害だけでない。人は平和であっても死んでいく。病気で死んでいく。年を取って死んでいく。人が死んでいくというだけでない。人は「死」というものの力にさまざまな形で脅かされたり、恐れたり、愛するものを丸ごと喪失してしまう死の威力の前で為すすべもなく、立ち尽くす。人は死の圧倒的な力に取り囲まれている。

ペトロの手紙を書き記した人も、そのことは否応なく思い知らされていたでしょう。けれどもこの手紙は神がほめたたえられますように、と語るのです。

わたしたちを取り囲んでいる「死」が凄まじい力を奮うものであっても、「神は豊かな憐れみにより、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して、わたしたちを新たに生まれさせ」るのだから、というのです。神がイエス・キリストを死者の中から甦らせたという場合、聖書は少なくとも二つのことをわたしたちに語っています。一つは、神は、人間の生と死のどちらにおいても神であるということ。つまり神は生きている時だけの神ではなく、死の領域においても神としての力を働かせてくださるということ。だからわたしたちは地上の生涯を終えて、それで終わりというのではない。死もまた神が支配し、神が共にいてくださる世界なのです。だからわたしたちは安心して死んでいける。そして、もう一つ。それは、生と死の神である主は、今生きているわたしたちに復活のいのちを与えてくださる、ということです。キリストが死んで神によって死に打ち勝って復活した、ということは今も主イエスは生きて、その復活のいのちによってわたしたちを新たに生かしてくださるというのです。この復活のいのちの中に、神はすべての人を招かれたのです。

それだけでなく、生き生きとした希望を与えてくださっている、ということです。それはどういう希望かと言えば、終わりの時にあらわされるように準備されている救いを受ける、という希望だということです。

終末というのは神が救いを完成する時、その時に神が準備してくださっている最終的な救いを受ける、というのが約束された希望なのです。

どうしてここで、生き生きとして希望、生ける希望という言葉を使っているのでしょうか。生けるという言葉を使うのは、死んだ希望、無くなっていく希望というものがあつたからです。それは希望とは言わない、というのかもしれませんが、事実いつの間になくなってしまふ希望が世には溢れているのです。自分の人生を振り返ってみてもそのことはよくわかる。若いときの希望、中年になってからの希望、跡形もなくなっている希望は少なくないのです。

しかしこの希望は朽ちず、汚れず、消えることがない。神が約束してくださる希望だからです。

けれども、この手紙を聞いた者たちもおそらくはそうであったように、いつもその希望によって歩いて行けたかどうか、そうでない時も多かったでしょう。しかし、この手紙が語るのは、その希望の中で歩めるよう、神の力により信仰によって守られている、ということです。ここで信仰というのは、わたしの頑張りとか、信念のようなものとは全く違います。そうではなく、神の働きかけ、導き、支えを受けとめ、応えていく、それを神が引き出してくださる、神が与えてくださる信仰のことです。その信仰によって、神が与えてくださる希望に生きるものとしてくださる、ということです。

しかし地上の生活ではなお、しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれない、とこの手紙は語ります。イエス・キリストの復活による新しい命を与えられても、この世ではいろいろな試練があるということです。誤解を恐れずに言えば、試練というのは、困難とか苦しみとか障壁のことばかりではないのです。平穏で、落ち着いていて、自分としてはうまくいっている、と思っている時が試練かもしれないのです。試練はさまざまな形をとるからです。けれどその試練は精錬と同じだということです。鉦石を粉々に砕き、篩にかけ、余分なものを取り除き、純金を取り出す。わたしたちの歩みは試練に直面し、実はさまざまな篩にかけられる。たくさん持っていると思っている希望が、実に色褪せる希望であり、失われる希望であるということも、篩にかけられてい

く。試練に遭うことで、まことの希望に生きる歩みへと信仰によって導かれる。実際われわれは実にいろいろな出来事に出会っていきます。コロナウイルスとの遭遇もその一つです。そこでわたしたちは自分の力で切り抜けようとしたり、さまざまな知恵で切り抜けようともがいたりする。その全部が精練なのです。砕かれ篩にかけられ、余分なものが取り去られ、本当の恵み、本当の希望は何かを示されていくとすれば、それは神の力により信仰によって守られている、ということなのです。そしてその試練をくぐりぬけていくのです。

今私たちはイエス・キリストを肉眼では見てはいません。見ていないのに、キリストの愛を感じ受けとめ、キリストを何らかの形でその愛に応えていきたいと願っています。イエス・キリストの愛に、十字架に、復活に深い感謝と喜びを感じています。そしてそれはもうすでに信仰による以外にはないもので、神が生きて働き、復活のいのちを与え、生ける希望を与え、働いてくださる。だからあなた方も信仰の実りとして魂の救いをすでに受けているのだ、とこの手紙は語るのです。

今わたしたちが覚えている地上の生涯を終えて神の御許に帰った方々、この方がは生も死も支配し、生きて働かれる神の恵みの中にあり、神の最終的な希望の中にある。それが聖書が語っていることなのです。わたしたちはその恵みを信じて、神をほめたたえていきたいと思うのです。